

地域で生活する高齢者の日常行動とフロー経験に関する研究

立命館大学応用人間科学研究科
 対人援助学領域
 発達・福祉臨床クラスター
 坂口 佳江

目的

高齢者の日常生活の経験の質を明らかにするために、フロー理論に基づき、動機づけ、行動、場所と最適経験といわれるフロー状態の関連を探り、楽しさ、コントロール感、幸福感、気持ち、時間の経過、身体状況との関係を分析し、その実態を把握する。又、個別のインタビューで経験四状態と生活の背景を探る。

方法：

対象者：調査の協力を受託してくれた60歳以上の高齢者60名（男性25名、女性35名）2004/7～2006/6まで実施。

検査方法：ESM(Experience Sampling Method 経験抽出調査)レポートを用いて1週間、1日8回合図を送り即時的経験を記載してもらった。リアルタイムを重視するというので、8時から21時の間に30分から3時間の間隔をあけて、携帯電話でシグナルを送った。携帯電話を保有してない人にはプリペイド式携帯電話を順番に貸し出した。(27人/60人45%) ESMレポートの他に属性のアンケートを書いてもらった。

結果と考察

対象者の属性：平均年齢は男性72.0歳、女性67.0歳、全体では69.0歳で、最高年齢は92歳であった。性別と年齢区分で4グループに分けて、統計処理を実施した。

表1 対象者の年齢・男女別人数

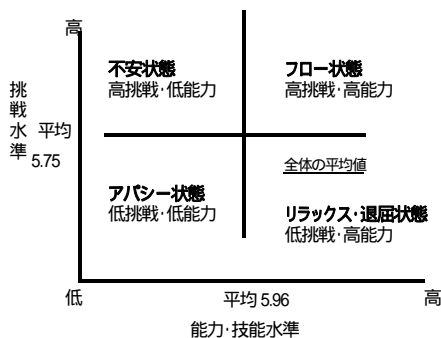
	60歳代	70歳代	80歳代	90歳代	計
男性	10	10	5		25
女性	26	6	2	1	35
計	36	16	7	1	60

表2 対象者のグループ分け

	60歳代	70歳以上	計
男性	10	15	25
女性	26	9	35
計	36	24	60

家族構成では全体で半数が夫婦2人暮らしであり、ほとんどに親しくしている友人・知人がいた。ボランティア活動や自治会の役員等の社会的な活動をしている人は63%で、60歳から始めた趣味を持つ人は81%と多く、90%が以前から趣味を持っていた。又、生きがいを持っている人の割合は全対で83.8%（男性84% 女性82.8%）であった。

フロー理論による経験四状態：フロー理論では、経験の質を決定するのはESMレポート「活動の挑戦」項目と「活動を行うための能力」項目からで、各項目の全体の平均値から経験四状態を算出した。ESMレポート枚数約3000枚（1人56回）



挑戦水準: 最小値=1.00 最大値=9.00 平均値=5.75 標準偏差=1.17
 能力水準: 最小値=1.00 最大値=9.00 平均値=5.96 標準偏差=1.28

図1 挑戦と能力の平均値からみる経験四状態

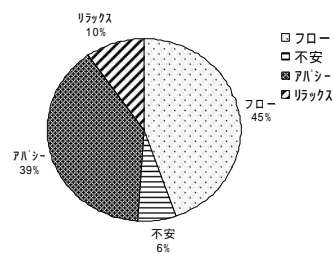


図2 全体の経験四状態

次に ESM レポートの中での動機付け、場所、活動状況、と経験四状態を²検定で統計処理をし、性別・年齢別の

4グループで比較した。分析し関連のあるものをあげた。動機付けでは内的動機付け（IM）でフローが高かった。場所では「自宅外の建物」とフロー状態、「自宅」にいる時はアパシー状態と関連があった。

活動状況からみると、「積極的レジャー」、「会話活動」、「社会的活動」とフロー状態は関連が高かった。楽しさや幸福論等の経験の質と経験四状態の関連も²検定で見ると有意の差があった

1週間にもわたる面倒な研究を引き受けてくれた対象者は知的好奇心の高い選別された人達であり、特殊なグループでの研究であったといえる。しかしフロー状態と気持ちや身体状況などの関連は高齢者が充実した楽しい日常を送るための今後のモデルとして参考になると考えられる。

引用参考文献：

今村浩明・浅川希洋志（2003）. フロー理論の展開，世界思想社